



明治文壇  
物語  
外史

巖谷大四

明治文壇  
外  
物語

工業学院图书馆  
藏书章

巖谷大四

新人物往来社

## 著者略歴

### 巖谷大四（いわや・だいし）

大正4年、東京に生まれる。昭和15年、早稲田大学英文科卒。文芸家協会、日本文学報国会書記を経て、戦後、鎌倉文庫出版部長、河出書房「文藝」編集長、「週刊読書人」編集長などを歴任。著者として、「波の登音——巖谷小波伝」「人間泉鏡花」「物語大正文壇史」「瓦版・昭和文壇史」「現代文壇人国記」「本のひとこと」「かまくら文壇史」などがある。

## 物語明治文壇外史

---

1990年10月5日発行

著者 巖谷大四©1990

発行者 菅英志

発行所 株式会社 新人物往来社

東京都千代田区丸の内3-3-1新東京ビルディング  
電話 代表(212)3931 振替東京6-151643

---

印刷／三晃印刷・製本／小高製本

(定価はカバー・帯に表示してあります)

ISBN4-404-01769-3 C0095

物語明治文壇外史



● 目次

最後の戯作者 仮名垣魯文	5
明治二年創業「丸善」と 早矢仕有的	31
明治初の女論客 岸田俊子	49
外地で死んだ最初の作家 二葉亭四迷	77
癌に苦しんで逝った 尾崎紅葉	99
『罪と罰』を最初に翻訳紹介した 内田魯庵	155
文士の自殺第一号 北村透谷	175
血まみれになって自害した 川上眉山	205
最初的女流ロシア文学者 瀬沼夏葉	229

装丁 ● 巖谷純介

---

最後の戯作者 仮名垣魯文



假名垣魯文



(二八二九〜九四)

文政十二年正月六日、江戸に生まれる。本名野崎文蔵、幼名兼吉。別号は鈍亭、野狐庵、猫々道人など。丁稚奉公中に戯作を耽読して花笠文京入門、のち放浪生活を送り作家活動に入る。戯作執筆のかたわら、瓦版や流行端唄などを手がける。「滑稽富士詣」で認められ、「西洋道中膝栗毛」「安愚楽鍋」などで花形作家となり、のち「假名読新聞」「いろは新聞」など創刊。明治二十七年十一月八日没。六十六歳。法名仏骨庵独魯草文居士。墓は東京谷中の永久寺。

安政二年（一八五五）十月二日亥の刻頃（今の午後十時頃）、突然、地鳴りと共に大地が上下に激しく揺れ、やがて大きな横揺れに変わった。いわゆる安政の大地震である。

その日の夕方、一冊の読切本を書き上げた仮名垣魯文は、その原稿を、日本橋通二丁目の出版屋糸屋庄兵衛のところへ、妻よしに持たせてやった。よしはその原稿料二分にぶを持って帰り、その一分を滞っていた地代として払い、残りの一分で米を買った。

よしが井戸端でその米を洗っていた時、ぐらぐらと来たのである。魯文は蒲団の中で本を読んでいた。その上に壁が落ちて来て、首まで埋まってしまったが、幸い、かすり傷ひとつ負わず、助かった。

その頃もなかなかぬけ目のない出版屋がいた。この大地震の騒動の最中に、三河屋鉄五郎という出版屋が、魯文の家にやって来た。この大地震の見聞録を三冊本にして出したいというのである。当時の三冊分は原稿約二百枚である。原稿料は特別に十両出すと言った。手付金も出すと言った。その日の米代にも困っていた魯文は、渡りに船と承諾した。しかし、三河屋は、何しろこれは際物きわものだから早く出さなくてはならない、三日間で仕上げると言った。いくらなんでも、あちこち見て廻らなくてはならないし、一人で二百枚を三日では無理だと思った。

そこへひよっこり、数年前、魯文が書いた『名聞なをきいておもてあかほん面赤本』という本の表紙絵を描いた、画家英泉の門弟英寿が訪ねて来た。英寿はまだ独身者で好奇心から地震のあとの町の様子

をあちこち見てまわった末にやって来たのだ。

魯文は早速、三河屋の話をして、稿料を半分やるから手伝わないかと言った。英寿も遊びの金がほしかったから喜んで引き受けた。こうして二人は、早速執筆に取りかかり、約東通り三昼夜で二百枚の原稿を書き上げた。それが三冊本『安政見聞誌』である。これが大いに当たり、彼は一躍、戯作者として評判になった。しかし、この本は公儀に無断で出版したので、版元と英寿が罪に問われたが、どういふわけか魯文だけは見逃された。そのため英寿の出獄後、しばしばゆすられたという。

仮名垣魯文は、文政十二年（一八二九）一月六日、江戸、京橋鎗屋町に生まれた。祖先は相模国（神奈川県）高坐郡萩園村で代々農業を営んでいたが、祖父野崎藤助の代になって、東海道筋の引地村に移り、鎌鍛冶を職とした。

文政初年、父野崎佐吉が、祖父と妻を連れて江戸鎗屋町に移り、魚屋を開業した。父はなかなかの風流人で、俳句や狂歌などを好んで作り、星窓ほしまど梶葉かきばという号まで持っていた。その頃の江戸は火事ばかり多く、鎗屋町の家は何度も火災に遭い、そのため生計がだんだん苦しくなっていた。

天保七年（一八三六）魯文が八歳の時、鎗屋町から具足町に移り、そこで妹のかよが生まれたが、この年大飢饉があり、家はますます貧窮し、三度の食事も二度にするありさま

だった。そして翌天保八年の春、魯文は、新橋竹川町の諸藩御用達鳥羽屋多吉方に十年の年季で丁稚奉公に出された。

鳥羽屋は本姓を三村みむらといつて、本家は三十間堀にある鳥羽屋清左衛門という大金持ちで、俗に十人衆と呼ばれた一人である。

魯文は、最初から商人になる考えは一向になかったので、毎夜、店がしまると、十返舎一九、山東京伝、式亭三馬といった人たちの作品を濫読し、少しでも小遣いがたまると本屋へ行って新しく出た本を買い求め、他の小売員たちのように飲食のために無駄遣いはしなかつた。

このようにして、二、三年鳥羽屋に勤めているうちに、文学への趣味は昂こぶずるばかりで、時々俳文や俳句を書いて小僧仲間に評判になり、鳥羽絵小僧という戯号で少しばかり人にも知られるようになった。

ちやうどその頃、細木香ほそきかうい以山人という、いわゆる通人が、放蕩のあげく、鳥羽屋に預けられていた。細木香ほそきかうい以は新橋山城町の酒屋津国屋の息子で、幼名は子之助、後に藤次郎と改め、「津藤つとう」と言え、遊里の巷で誰一人知らぬ人はないと言われた遊び人だった。藤次郎の父藤兵衛が、鳥羽屋三村多吉の姉すみを後妻に迎えていた関係で、双方親しくしていたが、藤次郎（香以）が二十歳の頃、ひどく遊び惚けて、新宿、品川の引手茶屋で大きな借金を作ったので、父藤兵衛はその不始末を怒り、一時、継母の里方である鳥羽屋へ預

けたのであった。

この香以山人が、魯文の文才を認めて可愛がつてくれたのである。

香以は鳥羽屋に預けられても、一向に謹慎の様子はなく、相変わらずひそかに吉原に遊び、当時の文士や俳人らと交わって、金をふるまったので、鳥羽屋へ香以を訪ねて来るものが少なくなかった。その取り次ぎをするのが魯文の役であった。そんなわけで、しだいに文士、俳人と親しくなり、自分も戯作者として世に立ちたいと思いはじめた。

以来、魯文は、暇をぬすんで、香以山人に俳諧の手ほどきを受け、また香以の紹介で、三世千種庵せんしゆあんもろもち諸持に狂歌を習い、また米羅坊めいらぼうしゆいち守一について、江戸座風の俳句を修めた。

規則立った学習を受けたわけではないので、組織的な知識を得たのではなかったが、生来頼智頼才のあった魯文は、要領を呑みこんで、巧みにこなした。

#### 十四、五歳の頃、

朝顔や水入竹みずいれだけの水をあげ

という句をよんで見せると、香以は、

「なかなかうまい。年の割にしては立派な句だ」と言って、香雨亭応一という俳号を与えた。

その上香以は、「お前はなかなか文才があるから、このままにしておくのは惜しい」と言って、その頃名の知られていた狂言作者花笠魯介はながさろすけ（文京）の門に入るように勧めたので

その気になり、十五歳の時、弟子入りした。その時、戯号を知堂珍海として、記念に、

砂原に蚯蚓みみずのたくる暑さかな

の一句を読んだ。

十六歳の時、処女作『政談青砥碑』を出版した。この時、英はながさ魯文と号を改めた。師の名の魯介の魯と、文京の文を併用したもので、英は花笠をもじったのである。

魯文はいよいよ自分も戯作者の仲間入りをしたという気持で、有頂天になり、まず戯号の披露をしようと思つて、曲亭馬琴、山東京山、為永春水、萬亭まんてい応賀、松亭金水といった著名な作家たちに頼んで、祝意を寄せた狂歌、俳句を貰い、黄表紙風にして出版しようと考えた。

ところが父の佐吉が突然死んでしまったので、その葬式や弟妹の世話をしなければならず、一時、戯号の披露を断念した。しかし、友人たちや、香以山人が同情して、出版の資金を援助してくれたので、『名聞なをきいておもてあかほん面赤本』と題した戯号披露の摺本を配ることが出来た。馬琴はその頃、盲目になつていたので、魯文が訪ねても声を聞いて話すというありさまだったが、それでも、

みそ揚あけげて作り上手に成たくば

世によくなれし甘口あまくちぞよき

という歌を寄せた。

そして、

「戯作者などになって、身を誤ってはいけない」と、諭したという。

その頃、魯文の心は戯作の方に傾いて、店の用事など手につかなくなった。おまけに香以山人に連れられて、しだいに劇場や花街に出入りするようになり、すっかり味を覚えて、遊蕩するようになったので、主人の多吉が心配し、ある日彼を呼んで誠め、

「暇を出すから何処へなりと行くがよかろう」と言った。実は多吉は、こう厳しく叱つたら、きつとふるえ上がって改心して、以前のように忠実に働くだろうと思つたのだが、魯文は、一日も早く店を出て戯作者として立つて行きたいと考えていたので、主人に詫びを入れようとせず、

「仰せごもつともですから、今日限り御暇を頂きます」と言つて、飛び出してしまつた。若気の至りで、いさぎよく鳥羽屋を飛び出したものの、さてこれからどうしようかと考へると、まるで五里霧中で、一時、ぼんやりしていた。

その頃、弟妹は他へ奉公し、父が住んでいた家はたたんでしまつて無かつたので、止むを得ず、木挽町のグレ宿（安宿）松川屋に泊り込んで、筆を執りはじめたが、まだかけだしの、たいして名の知れない彼のところへ原稿を依頼する物好きな出版屋はなかつた。

魯文は仕方なく、持っている衣類などを質に入れたりして宿料を払い、わびしい日を送っていたが、ある日、盗賊改めの目明かしがやって来て、うさんくさい様子をした魯文を

引つ立てようとした。驚いた魯文は、

「私は戯作渡世をするものでございます。決して怪しいものではございません」と弁解したが、目明かしは容易に信用せず、結局、彼を木挽町の自身番へ引つ立てて行つた。そこで訊問がはじまつた。

「お前は戯作者だというが、そんなら自分の家がある筈ではないか。無宿者のいる安宿にころがり込んでゐるのは一体どういうわけか」

魯文は弁解に困つて、やむなく、紙をもらつて、そこへ狂歌を書いた。

仲間には入らぬ緑の林ぞと

いまだに萌出しの草本作者 英魯文

たまたま「面赤本」を見ていた岡つ引きがいて、

「では、お前は花笠の門人かね」と言つて、はじめて疑いが解け、ようやく釈放された。

これにこりた魯文は、すぐにグレ宿を飛び出し、いったん、故郷の相模国萩園村にある本家に帰る決心をし、江戸を出た。それからしばらく漂泊の生活がつづいた。

魯文は、本家に行きさえすれば何とかなると考えていた。そして本家にたどりついて窮状を告げると、

「百姓でもするなら、世話してやる」と言われた。しかし、魯文は、百姓だけは気がすすまなかつたので、



「何か他に、自分にふさわしい職業はないだろうか」と懇願した。本家の人は、

「南須賀村に長楽寺という寺がある。そこへ行けば何とかなるだろう」と言った。

魯文は、寺ならばいくらか学問の修行も出来るだろう、と考えて、長楽寺を訪れ、剃髪して僧になった。心ならずも住職のもとで経文を習ったが、心は戯作の方へ行っていたので、阿呆陀羅經を勝手に自分で作り上げて、それを仏前で朗読したりしたので、住職の怒りに触れ、半年もたたないうちに追い出されてしまった。

腹を据えた魯文は、江戸に帰り、葭町の慶庵（職業案内所）に頼って、油町の藤岡屋という書店の店番になった。

ところがこれも長く続かなかつた。魯文は毎日店頭に坐ってはいたものの、小説、戯曲、随筆などを耽読し、客が来てもらうに應對もせず、そのため店の本が盗まれてばかりいた。これでは店番の役に立たない。主人が、

「もう少し店の事に注意してくれなくてはこまる」と言っても、一向にあらためなかつた。そこへある日、鳥羽屋時代の知り合いの柳下亭種員たねぢという男が本を買いにやつて来て、「何だ、君はここにいろのか」と声をかけられると、魯文は、すっかり尾羽うち枯らした姿を見られて恥ずかしくなり、挨拶もそこそこに、裏口から店を飛び出してしまった。

その夜、魯文は、ある安宿に泊り、これからどうしようかといういろいろ考えていると、同宿の客人の武蔵屋良助なるものが言葉をかけて来た。